

アメリカのテロリズム、長く恥ずべき歴史

ノーム・チョムスキー

『In These Times』2014年11月3日

<http://www.chomsky.info/articles/20141103.htm>

翻訳：寺島隆吉&寺島美紀子、公開 201500307

世界公認の事実。米国は世界のテロ国家であり、米国もそれを自慢にしている。

それがニューヨークタイムズ紙 10月15日のトップニュースの大見出しとなるべきだったが、もっと穏便な題名になっていた。

「秘密のテロ支援にかんするCIAの調査研究は、シリアの反政府勢力を支援することにたいする懐疑論を増幅させた」

その記事は、米国による最近の秘密工作が有効だったのか否かをCIAが再検討したことについて報じたものだ。不幸にも秘密工作で成功したものは極めて稀だったので再検討が必要だというのが、ホワイトハウスの結論だったという。

その記事によれば、バラク・オバマ大統領はCIAに「資金や武器を供給したりして反乱が成功した国があるのか」を調査してくれと頼んだが、大したものが出てこなかったので、今後も秘密の支援を続けるかどうか躊躇している。

そのニューヨークタイムズ紙の記事は、冒頭で「裏支援」の実例として三つの国に言及している。すなわち、アンゴラ、ニカラグア、キューバである。じっさい、いずれの事例も米国によっておこなわれた巨大なテロ作戦だった。

当時の南アフリカ共和国（以下「南ア」とする）はアンゴラを侵略していた。ワシントンによれば、南アは、世界で“もっとも悪名高いテロリスト集団”のひとつ、ネルソン・マンデラのアフリカ民族会議から自国を防衛していた。1988年のことだった。

そのときまで、レーガン政権は、アパルトヘイト（人種隔離体制）を支援する、世界でただ一つの国だった。下院の経済制裁決議まで踏みこいて南アとの貿易を増大させた。

その間、ワシントンは南アに協力して、アンゴラのテロリスト集団に不可欠な軍事支援を提供した。ジョナス・サビンビ(Jonas Savimbi) が率いる UNITA（アンゴラ全面独立民族同盟）という集団だ。

しかも国際監視団によって注意深く監視された自由選挙でサビンビが完敗し、南アが支援を止めた後でさえ、米国はサビンビに軍事支援をつづけた。サビンビは「権力をひたすら追い求め、自国民にひどい不幸をもたらした怪物」であった。これはイギリスのアンゴラ駐在大使マラック・グールドィング(Marrack Goulding)の言葉だ。

その結果はおぞましいものだった。1989年の国連調査によれば、アンゴラなど隣国諸国における南アの略奪行為は 1500 万人の死をもたらした、南ア国内で何が起きていたのかは、言うまでもないことだ。キューバ軍は最終的に南アの侵略者たちをアンゴラから追

い払い、不法占領されていたナムビアからも撤退させた。米国だけが怪物ザビンビを軍事支援しつづけたのだ。

キューバでは、1961年のピグス湾侵略が失敗に終わった後も、ジョン・F・ケネディ大統領は、キューバに更なる「地球規模の恐怖」"the terrors of the earth"をもたらすために、殺人的破壊的な作戦 [マングース作戦 (Operation MONGOOSE)] を開始した。この「地球規模の恐怖」という言い方は歴史家アーサー・シュレジンジャーの言葉で、彼はケネディの親しい仲間であり、彼が著したロバート・ケネディの準公式の伝記の中にあるものだ。しかもロバート・ケネディ [ジョン・F・ケネディの弟、当時は司法長官] はキューバにたいするテロ戦争を指揮する責任を割り当てられていた。

キューバに対する残虐行為はそれはひどいものだった。そのマングース作戦は、軍事訓練を施した亡命キューバ人をキューバ本土に派遣して破壊活動を実施させ、また CIA を中心にカストロ暗殺計画、キューバ侵攻作戦の計画立案を進めていた。このキューバ侵攻作戦の準備は 1962 年 10 月 20 日に完了する予定であった。

今では、この作戦が、ロシアの首相ニキータ・フルシチョフがキューバにミサイルを配備した一つの理由だったと学問的には認められている。またそれが、核戦争で世界を破壊させかねない「キューバ危機」を引き起こすことになった。国防長官ロバート・マクナマラは後に、もし私がキューバ人かソビエト人だったら、私だって「米国の侵略を予期して何らかの防衛策 [核ミサイルを配置するなど] を講じただろう」と認めた。

アメリカのキューバに対するテロリスト攻撃は三〇年以上も続いた。キューバ人の犠牲はもちろん大変なものだった。犠牲者たちの声は、米国ではめったに聞かれないのだが、カナダの学者キース・ボウレンダー (Keith Bolender) の研究によってはじめて詳細に報告された。2010 年刊の『アメリカに対峙するもう一つの世界からの声：キューバに対するテロ行為の口述歴史』 (Voices From the Other Side: An Oral History of Terrorism Against Cuba) である。

長期にわたるテロ戦争の被害は、破壊的な禁輸措置・通商禁止でさらにふくれあがった。この通商禁止は世界中からの批判を無視して今でも続いている。今年 (2014 年) 10 月 28 日、国連は、二十三度目のことだが、「キューバにたいして米国がおこなっている経済・貿易・金融の封鎖を終える必要性」を支持する決議を採択した。投票は 188 対 2 (米国とイスラエル) だった。3つの国が棄権したが、それは米国の属国である太平洋の小さな島嶼国だった。

ABC ニュースによれば、キューバにたいする通商禁止には今では政府高官のなかにも反対がある。なぜなら「もはや役に立たない」からだ。(そこでは、ヒラリー・クリントンの新著『むずかしい選択』が引用されている)。またフランス人学者サリム・ラムランニ (Salim Lamrani) も、彼の 2013 年の著書『対キューバ経済戦争』のなかで、キューバに与えた巨大な損失、キューバ人に対するひどい犠牲について再検討している。

米国によるニカラグアへのテロ行為は、ほとんど言及するに及ばないほど世界的に知られた事実だ。ロナルド・レーガン大統領のテロ戦争は、1986 年、国際司法裁判所 (World

Court) から厳しく批難された。そして米国にその「不法な武力行使」を終了し、実態に見合った賠償金を支払えと命じた。

ところがワシントンは、それにたいして戦争をエスカレートさせることで応え、1986年の「すべての国は（それはつまり米国のことを意味しているのだが）国際法を遵守すべし」と呼びかけた国連安全保障理事会決議にも拒否権を発動した。国際司法裁判所の判決が出されたのと同じ年だ。

[註：World Courtとは、常設国際司法裁判所 the Permanent Court of International Justice の俗称。オランダの The Hague にある。]

もう一つのテロリズムの実例は、今年（2014年）11月16日に25周年記念が催されることになっているイエズス会司祭の暗殺である。このときエルサルバドルの首都サンサルバドルでは、エルサルバドル軍のテロ部隊によって6人のイエズス会司祭が暗殺された。このテロ部隊は米国によって武装され訓練され、軍の最高司令官の命令で、イエズス大学に乗り込み、司祭たちと目撃者たちを殺した。そのなかには彼らの家政婦や娘も居たのだ。

この事件は1980年代の中央アメリカにおけるテロ戦争の頂点をなすものだった。だがその影響は、“不法入国者”というかたちで、いまだに今日でも新聞の第一面を飾っている。しかし彼らが大挙して“不法入国”するのは、その大虐殺の結果から逃げだした結果なのだ。それが今度は米国から国外追放されている。彼らは廃墟となった自国に送り返されても、運がよいものしか生きのびることが出来ない。

ワシントンはテロを生み出すことにかけては世界一だということが、また新しく明らかになった。元CIA分析官ポール・ピラー（Paul Pillar）が、シリアにおける「米国の爆撃が民衆の怒り・憤慨を引き起こすことになっている」と警告しているからだ。この爆撃が、ジャブハト・アル＝ヌスラ（Jabhat al-Nusra）やイスラム国（the Islamic State）といったジハード組織を、さらに強化することになるというのだ。彼らは、「この爆撃をイスラムに対する戦争だと描くことによって、昨年からの分裂・不和を修復して米国の介入に反対する協同行動を取る」ことが可能になるからだ。

これが米国の作戦がもたらした結果であるということは、今では誰しも衆知の事実だ。米国のテロ戦争が、ジハード（聖戦）をアフガニスタンの片隅から世界の大部分に広げるのに貢献したのだ。

聖戦主義がもっとも恐ろしいかたちをとって現れているのが、イスラム国家（the Islamic State）、すなわちISISだ。それはイラクとシリアの大きな領域に残忍なカリフ制度を樹立した。

「このような組織をつくりあげた最大の功労者は米国だ」と元CIAの分析官で、中東問題の著名な解説者グラハム・フルー（Graham Fuller）は述べている。彼はさらに次のように言い添えている。「米国はISISをつくりあげる計画は立てなかったかもしれないが、中東における破壊的な介入とイラクにおける戦争がISISを誕生させる基本的原因だった」

これに対して、もうひとつの要因をつけ加えたほうがよいだろう。オバマによる世界最大のテロ作戦、つまり「世界的規模の“テロリスト”暗殺計画」のことだ。無人爆撃機（drone）

と特殊部隊による無差別の爆撃と殺戮が“アラブ民衆の怒りを生みだしてきたこと”は、余りにも有名すぎて、さらなる説明を必要としないだろう。

これが、私たちが恐怖をもって熟考すべき、アメリカのテロの歴史なのだ。